健康を科学する（教科等横断的な学び×地域連携）

－ みんなでつくろう！一人一人が「心身ともに健康」な城山っ子 －

実施担当者　犬山市立楽田小学校
養護教諭　林　恵子

１　はじめに

健康教育はどこの学校でも行われており、取り立てて珍しい実践ではない。だが、その多くは、養護教諭が、個人の力で実施していることが多い。学校保健計画の年間指導計画上は、各教科等と関連させていることになっているが、理科の特質を意識した見方・考え方まで踏み込んで授業を構築していないだろう。そこで、理科で学習するカリキュラムを養護教諭と理科専科の教諭で情報交換を行い、関連性を高まるように、実践学年を調整するなど意図的な関連カリキュラムに再構築した。本実践は、これまで楽田小学校で積み上げてきた実践を、「健康を科学的にアプローチする」という視点でカリキュラム・マネジメントを行うことで、主体的に児童が健康教育に取り組む意識を持たせることを目指している。

重点目標と関連させた取組の内容において２本の柱を計画した。

一つ目の柱が、健康にかかわる学習内容を教科等横断的な視点でバランスよく配置し、さらに地区の強みを活用しながら学習展開を実施していくこととした。具体的には、４年理科の筋肉と骨の学習では日本モンキーセンター（以下 JMC）と連携して授業を行っているが、さらに学活（食育）と保健と関連させた牛乳（カルシウム）の大切さの学習を実施した。６年理科の消化の学習では、サルの消化管を観察することで、消化についての考えを深め、その後の家庭科の３大栄養素に関する授業と、保健として風邪に負けない免疫獲得の授業とを連携させた。

命の授業は、２年生の学活、５年生の理科と似た内容であるが、学年に応じた視点で、繰り返すことにした。６年社会の学習において近隣の博物館明治村に出かけるが、北里柴三郎研究所にも訪れ、ウイルスや感染等の認識に対する戦いの歴史についても考えを深めた。

二つ目の柱が、特別活動で実施している委員会活動において、積極的に健康に関する情報発信を行っている保健委員会を核に、学校全体に情報発信にしていくことで、児童に健康に関するリーダーシップを発揮させ、活動が活性化することを目指した。５・６年生各クラスから２～３名の代表が選出される保健委員会には、毎週木曜日に全校に対して情報発信を行う「すこやかタイム」で健康にかかわる取り組みを発信している。さらに、学校保健委員会の中で、児童の学びを学校医や保護者に向かって説明する機会がある。この場で代表児童が、科学的な見方・考え方をベースした取り組みを紹介し、「健康とは科学である」という認識を全校児童に意識化していくことを目指した。

２　健康教育の視点で行う理科

２－１　食べる

４年理科の筋肉と骨の学習では、日本モンキーセンターへ行き、骨の発達と運動の関連性についてサルの特殊能力と比較して考えをもつ。その後、食育において牛乳（カルシウム）の大切さの話と十分な骨密度による健康な生活、適度な運動の必要性について学んだ。

６年理科の消化の学習とよく噛むことの大切さを結び付けた学習展開を実施した。消化とは食べ物を細かくすることで、よく噛むことは吸収の助けになる。歯を大切にすることは、健康を維持する上で非常に大切な視点である。水溶液の学習で卵の殻を酸の中に入れて、溶かす実験をした。このことも歯を清潔に保つことの動機づけになるように話題を絡めた。

２－２　命の誕生

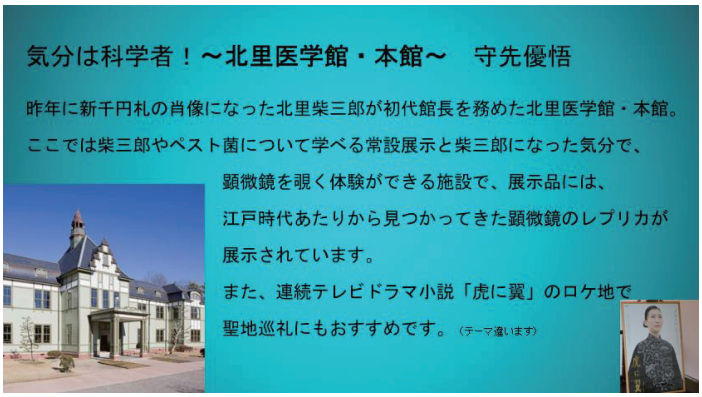
２年生の学活の時間に養護教諭が、妊婦体験、育児体験、産道を通るなどの体験を用意した。これらの体験から実際の赤ちゃんや母親の気持ちを少しでも理解できるようにした。

５年生の理科の学習では、人の誕生とサルの誕生の比較から人は早熟な状態で生まれるため、大人で子どもを守る文化があることや、生物によっては、たくさんの卵を産んで子孫を残す種もいることを学び、生物によってそれぞれの戦略で生きていることを学んだ。

２－３　北里柴三郎

６年生校外学習にて近隣の明治村に出かけた。北里柴三郎研究所にも訪れ、ウイルスや感染等の認識に対する戦いの歴史についても考えを深めた。前期の食べ物の細かくすることが消化であるが、そ

の細かくした栄養をバランスよくとることが免疫に効果があることと話をつなげた。サルの消化管についても、学び、葉を食べるサルは腸が長く、花や木の実などを食べるサルは腸が短いことを知った。保健の学習でも、風邪に負けない免疫獲得の授業を実施した上で、北里柴三郎について学んだ。



３　健康教育の視点で行う特別活動（委員会活動）

３－１　すこやかタイム（朝の活動）

毎週木曜日に全校ですこやかタイムとして、身近な健康情報を発信する場が設定されている。ここでは、主にストレッチや体操、時にうがいや歯の磨き方、おやつのとりかたなどの情報発信を行った。この内容を理科の学習のタイミングと内容を活用した情報をいれこむことで、学習の接点となった。

３－２　学校保健委員会

年に一度、学校保健委員会として、高学年全体で学んできたことや、これまでの健康に関する取り組みを共有し、学校医にコメントをもらっている。その場を活用して、健康に関する「探究」を行った。全員が実施しなければならない通常カリキュラムに比べて、健康に対する意識の高い児童が集まってくるのがこの委員会である。よって、問題意識に対しても高い。「手洗いの重要性」について、パンに細菌をつけて実験をすると、はっきりと結果が出た。実験を行った子どもたちも「こわい」「気持ち悪い」だから「手洗い大事」なんだと口々に話をした。

自分たちで実験をしたことなので、発表をする子どもたちも、生の自分の言葉で説明することができていた。参加者である委員会以外の児童も、「なるほど」「わかりやすい」というコメントを発していた。

学校医からも「面白い視点であった」「ぜひ低学年にもこの話をしてほしい」とコメントをもらった。そこで、早速映像を作成し、朝の会で放映した。また、給食前の昼の放送において、コメントをつけながら手洗いの大切さを話している保健委員会のリーダーたちの姿があった。

4　まとめ

本実践の価値は、「心身の健康の保持増進」に関する現代的な諸課題を、教科等横断的な視点で「理科」と「保健」を核にして、学校教育全体で実施することにあった。これまで取り組んできたカリキュラム・マネジメントの実践で得てきた地域の強みを活用することは、主体的学び・実感のある学習などにつながりえる取り組みとなりえる。また、犬山には日本モンキーセンターや明治村など誇るべきコンテンツがあり、これらの素材を活かしながら実践をすることは、この町で住んでいく上で、シビックプライドのような誇りになり得る。今回の実践は、子ども達にとって自信につながったようである。

①　持続可能な「児童が実感できる生活に密着した『探究』」

探究の場を現行のカリキュラムの中で確保することは難しい。最近「カリキュラムオーバーロード」という言葉で語られ始めているが、総合的な学習の時間で実施している行事等の精選を相当数行っても、調べ学習の域を超えることがなかなかできていないのが本校の実態であった。しかし、特別活動の時間を活用した取り組みならば、地域や保護者の協力を得やすいことが見えてきた。さらに、委員会活動において取り組み、主体的な探究活動を実施した。健康というテーマは、児童にもイメージがしやすく、カリキュラムにも関連しやすかった。また、養護教諭は学校に確実に配置され、継続的に一つの委員会に所属している確率が高いため、この実践は一つの可能性を構築できたのではないかと考えている。

②　主体的なリーダーたちの「全校への発信」と「地域への発信」

週 1 回の「すこやかタイム」と年 2 回の学校保健委員会を活動の主な場として、情報を発信した。これまでの発表は、教師が準備した台本を読み上げることが多くなりがちだが、科学的な探究を実施した発表により、健康に関する探究を行うことで、学校全体・地域全体にその取り組みが伝わった。実験も交えた探求を行うことで、先生たちには理科に対する授業改善にもつながりえる効果があった。参観する保護者にも、劇をすることが発表というイメージや、本や文献をまとめるだけの発表というイメージから脱却することもできたと感じている。

謝　辞

中谷財団の皆様から支援をいただき、たいへん頂いた貴重な体験をすることができました。また、今後も継続していく上で基盤となり得る整備も行うことができました。この想いを次世代に必ずつなげていきます。本当にありがとうございました。

以上